

今日、京都御苑は、烏丸・今出川・寺町・丸太町の通り沿いの石畳(石の扉)や築地塀で囲まれている。あの京都御苑と町を隔てる境界の壁は、江戸時代からあったのだらうか?

結論から述べると、烏丸通に石畳が築かれたのは明治十二(一八七九)年のことである。この時江戸時代にもっと内側にあった蛤御門や中立売御門を烏丸通に面して付け替えた。

道筋を荘厳に演出

そもそも「京都御苑」という言葉も、明治二年三月の東京「寛都」後、荒廃した禁裏御所(天皇の居所)・仙洞御所(院の居所)・公家町などを含む空間の公園化を図り、同十一年にネーミングされた。榎村正直京都府知事の時代である。

今日の京都御苑にあたる範囲が公家町として整備されるようになるのは、宝永五(一七〇八)年の大火以降である。その当時、烏丸通の道幅も五尺ほどしかなかった。九門(蛤御門・今出川御門・堺町御門など)から禁裏御所へ向かう道の両側には築地塀があった。築地塀は、烏丸・今出川・寺町・丸太町の通り沿

江戸時代は観光スポット

京都御所 公家参内を庶民が見物

さて江戸時代の九門内は観光スポットだった。正確に言うと、天皇が住む禁裏御所のなかに庶民が入れられるのは、正月十九日の舞御覧、三月三日の開鶏、七月十四、十五日の灯笼、それに節分などの限られた日である。たとえば節分の日、庶民は禁裏御所の神鏡を安置する内侍所に十二文の賽銭を納め、豆をもらう。また

さて江戸時代の九門内は観光スポットだった。日には、「札切手」を買った限られた男女が、承明門の外から儀式次第を眺め、即位式の翌日には、高御座や調度などを二股公開した。すさまじいのは享保十八(一七三三)年十二月におこなわれた、法華経を講説する御八講である。禁裏御所の清涼殿近くで、三井寺円満院が「宝冠釈迦」の出開帳をおこない、人々がわんさと押し掛ける(「月堂見聞集」)。

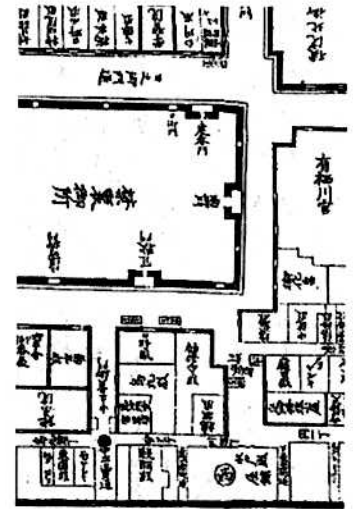
高木 博志



ては人どごころか、享保十四年、長崎から江戸に向かう象が、途次、禁裏御所と仙洞御所の庭に参入する。公卿門前には、檜垣茶屋という酒肴・果物を出す店まであった。「掌中雲上抜錦」には、門前の二つの腰掛けまで丁寧に描き込まれる。その雰囲気も、尊皇論者の野村望東尼は「さざめきていそがしげなり」と伝える。

明治20年代以降に 厳粛な国家空間へ

は、堺町御門から入り、築地塀のなかを北上して、禁裏御所南西の公卿門(宜秋門)前で公家衆の参内を鑑賞し、今出川御門に抜ける。この公卿門前における公家衆の参内、異形の公家たちの鑑賞こそが、京都観光の目玉であった。江戸時代中後期の案内記や名所図会などには、公卿門参内の図が多く登場する。江戸から始まる、東海道五十三次の双六の「上がり」も、公卿門における公家衆の参内である。宮中の何をみても感動しっぱなしの本居宣長など、公卿門前で公家衆を間近に見て立つこともわすれて、



「掌中雲上抜錦」のうち禁裏御所周辺の部分。公卿門前の腰掛けまで描かれている。(京都大学附属図書館蔵)

たかぎ・ひろし氏 1959年大阪府生まれ。立命館大学大学院博士課程修了。専門は近世・近代日本文化史。北海道大学助教授など。

京都御苑の形成は明治十年、明治天皇の京都行幸が契機となる。榎村京都府知事時代に、九門を付け替え、境界としての石畳を築き、御苑内に植樹をし道路を整備する。そして明治十六年、岩倉具視の京都御苑保存の建議により、国際社会のなかで古都京都の文化的「伝統」を戦略としてアピールする時代がやってくる。

維新後、明治二年の東都府知事時代に、九門を付け替え、境界としての石畳を築き、御苑内に植樹をし道路を整備する。そして明治十六年、岩倉具視の京都御苑保存の建議により、国際社会のなかで古都京都の文化的「伝統」を戦略としてアピールする時代がやってくる。

明治二十年代になる(京都大学助教授)



天明7(1787)年の「拾遺都名所図絵」より。公家の参内を見物する京上りの人たちが、檜垣の茶屋などが描かれている。